

## 回想（四日前、出発の朝）

タオルを首にかけ、団扇で風を起こしながら庭を眺めていた俺の肩を、誰かがぽんぽん、と二回叩いた。その力がやけに強く、乱暴だったことから、俺はすぐにその行為が誰によるものなのか分かった。

「親父？」

「そろそろ行くからな」

「ああ」

短い会話を交わした直後、父は足早にその場を去った。

俺は玄関まで見送るべきだと思いながらも、もう少しの間ここでのんびりしていたい気もして、結局縁側に留まる事に決めた。

くまぜみ  
熊蟬の鳴き声が家中に響き渡っている。いやもしかすると、村中に。こう騒がしくては、皆仕事も勉強もろくすっぽ手につかないに違いない。

ああ、でも今日は日曜日なのだ。仕事が休みの人も多いだ

ろう。そうでない人も平日よりは楽なスケジュールだろうし、勉強をしているのは受験生くらいのものだろうか。

そういえば自分もまだ宿題が終わっていない。漢字の書き取りやら数学のプリントやら、小中学校の焼き直しかと思うような忌々しい課題達が鞆の中で眠っている。

結局高校に入ったからといって、特別に変わる事などありはしないのだ。強いていえば、「義務教育ではない」という理由で、留年や退学があり得るだけ。

そんなつまらないことを考えていると、外の方から陽気な話し声が聞こえてきた。登山仲間のご到着のようだ。

「雄二ー！後のことはよろしくなー！」

「おーす」

俺はまるで覇気の無い声を発した。どうせ帰ってくるのは夜遅くになるだろう。それまで一人で留守番している、というわけか。

父が登山をするのは別に珍しい事ではなかった。月に一回程度は、こうして何処かの山へふらりと出掛けていくのだ。

だがまさか、御棺山みきさんとは。

御棺山は、この奥曾根村内に位置する標高千五十七メートルの山だ。登山道は余り整備されていないが、比較的初心者でも登りやすい山だと聞く。最早プロの登山家並に山を愛している、といっても過言ではない父が、わざわざ友人を集め計画を立てて行くような所ではない。

何となく気が向いたから、かな。

俺は一応そう解釈していた。何時も二千メートル、三千メートル級の山にばかり挑戦していたら、時には低い山にも登ってみたいなるのかもしれない。何か深い意図があって、ということではないだろう。

古い門扉を閉める時に出るギイイという不快な金属音が聞こえた。どうやら一行は去ったようだ。

俺は父が鍵をかけていかなかった事に遅ればせながら気づき、ぶつぶつ言いながら重い腰を上げた。こうなる事が分かっていたなら、初めから見送ってやったのに。

この時の俺にとって、それはごくごく普通の出発に思えた。